



市長インタビュー

平和を考え平和を学ぶ 地域社会の実現をめざして

●市長の戦争体験についてお聞かせください。

斎藤市長 終戦のときは6歳で小学校1年生でした。所沢には、当時、陸軍の基地があったせいか、空襲がよくありました。焼夷弾という火炎爆弾も落とされたものです。空襲警報が鳴るたびに防空壕に避難した記憶があります。空襲は、人の命や財産を奪うためのものですから、いつ自分も犠牲になるかという思いもあり、怖かったですし、早くこんな生活が終わればよいと幼心に思っていました。私も戦争を知っている世代ですから、戦争は失うものばかりで何も得るものではなく、二度と起こしてはいけないと強く願っております。

●所沢市の平和推進事業についてお聞かせください。

市長 本市の平和推進事業は、昭和60年から本格的に実施しており、平成2年の平和都市宣言の制定を契機に、翌年からは、市民の方にも広島市平和記念式典に参加していただいたり、平和講演会などを実施したり、多くの方に平和の尊さを知っていただくための事業を展開しております。また、昨年からは、平和を語る会として被爆体験者の方や戦争体験者の方に語り部としてご協力をいただき、市内の小学校や公民館などで講話会を実施し、たいへんご好評をいただいているところです。さらに、今年度の広島市平和記念式典参加事業には、若い世代の市民の方に参加いただくことになり、平和への願いをしっかりと伝えていきたいと考えています。これからも多くの方に平和の尊さ、戦争の悲惨さを理解していただくため、平和推進事業の充実を図ってまいります。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

終戦から62年 いま平和への願いを

平和を語る会・語り部派遣事業

「平和を語る会」開催予定

皆さんも語り部の方のお話を聞いてみませんか。

とき	ところ	語り部
8月18日(土) 午後1時30分～	男女共同参画推進センターふらっと	岡光 静乃さん
9月1日(土) 午後1時30分～	富岡公民館	中島 寿々江さん

◎直接会場へお越しください。手話通訳がつけます。



昨年のようす

「平和祈念資料展」

市役所1階市民ホールで、市が所有する広島・長崎の原爆写真パネルや記録図書の展示、平和に関するビデオ上映などを実施します。

とき 8月23日(内)から29日(内)まで
(土・日曜日も開催) / 午前8時30分から午後5時まで
◎29日(内)は午後3時までです。

埼玉県平和資料館のご案内
平和に関する常設展示や企画展示、映画会、夏休みの特別行事などを実施しています。
開館時間 午前9時～午後4時
30分(月曜日休館)
◎詳細はお問い合わせください。
問い合わせ 同資料館(東松山市岩殿2-4-1) 113-30
493-3541113 FAX 0493-3541112

医師も病院もなく、ましてや広島市内は大勢の被爆者ですから、自らの手で夫を看病しなければならず、だれにも頼れる状況ではありませんでした。それからというもの、ひたすら夫の看病に明け暮れたわけです。夫が回復し、歩いたときには、言い表せないくらいうれしく、生きていてくれて、また、私も生きていてよかったと思つたものです。



救われました。夫の看病の体験を通して、被爆者の悲しさ、命の大切さを訴えます。体験をもとに執筆された著書に「オレンジ色の夏(八月の広島)」があります。
◎岡光さんの思い
昭和20年当時、私は家族と夫の勤め先のある広島市に住んでいました。8月6日、前日宿直だった夫が朝、自宅に帰って来るというときに原爆が落とされたのです。本当に一瞬で何もかもちゃめちゃになったという感じがして、辛い原爆が落ちた場所から離れて、橋の上で被爆し全身火傷で生きていたのがやっとなんか感じていた。

広島市旧庁舎被爆敷石

所沢市役所の西口玄関前に
広島市から贈られた被爆敷石があるのをご存知ですか？



この被爆敷石には、以下の内容が刻まれています。

この石は、広島市に原子爆弾が投下されたときに、同市庁舎前の敷石としてあったものを本市の平和への限らない願いと世界平和の祈念のため、とくに広島市の御好意により、昭和59年2月に譲り受けたものです。次の言葉とともに……

No more Hiroshima (ノー モア ヒロシマ)

◎この敷石への献花・献水を8月3日(金)から15日(木)まで行います。

所沢市平和都市宣言

武蔵野の緑豊かな自然のなかで、やすらぎに満ち、健康で生き生きとした日々を送ることが、私たち市民共通の願いです。

私たちは、国是の非核三原則を厳守し、戦争という過ちを繰り返さないことを願うとともに、限りある資源を大切に、かけがえのない地球環境を守り、平和な世界が確立されることを強く望みます。

所沢市民は、基地全面返還を求め、未来に向かって平和な社会を築くことを誓い、ここに平和都市を宣言します。

平成2年6月22日議決、同年7月1日告示



所沢市の平和推進事業

『平和』について考えてみませんか

昭和20年8月6日午前8時15分に広島市に、8月9日午前11時2分に長崎市に人類史上初めての原子爆弾が投下され、多くの尊い命が失われました。平和な社会は、戦争の悲惨さや命の大切さを理解することから始まるのではないのでしょうか。今回は、市民の皆さんに戦争の悲惨さと平和の尊さをあらためて考えていただく機会を提供するため実施している、「平和を語る会」などの平和推進事業について紹介します。

被爆体験者・戦争体験者が語る 「平和を語る会」(語り部派遣事業)

平和の尊さ・命の大切さを理解するために

この事業は昨年度、小・中学校や公民館などで延べ15回開催し、約800人もの方々に参加をいただきました。分かっていくつもりだった戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさ、命の大切さなどを再認識してもらった良い機会となっております。平和を、いま一度見つめ直すきっかけにしてみませんか。◎同事業の開催予定は、左ページをご覧ください。

語り部の方の体験と思い

語り部として活躍している3人の方を紹介いたします。
◎中島 寿々江さん
小学校(11歳)のとき、広島市内の爆心地から500mの距離にある家に祖母と生活していましたが、原爆投下の数日前にたまたま父親の家に移っていたため大事には至らなかったが、被爆しました。被爆の体験をもとに、戦争の悲惨さを訴えます。
◎中島さんの思い
今まで、被爆のことを人に話すことは避けていました。本当につ



語り部の活動を通して、話を聞いてくれた小学生の皆さんから励ましや健康を気遣うお手紙、ご自分の今後の人生の平和に対する強い思いなどを寄せいただき、私自身の励みとなり、これからも勇気を持って話していきたいとの確かな思いになりました。

岡光 静乃さん

夫の健男さんは、広島市内の勤務地から帰宅する途中、爆心地から1・6km地点の観音橋の上で被爆しました。静乃さんの献身的な看病により、奇跡的に死の淵から

広島市平和記念式典参加事業

毎年8月6日に執り行われる「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に、今年も市民の代表の方が参加します。

本事業は、8月5日に広島入りし、平和記念資料館や平和記念公園などの見学、原爆慰霊碑への献花を通して、原爆死没者の冥福を祈り、唯一の被爆国であることを目的としています。

翌6日は、例年午前8時から開式となる式典に参加します。現地ではわからないこと、感じられないことがあり、多くの方が厳粛に行われる式に感慨を新たにされます。

なお、被爆による悲惨な事実を、次代を担う若い世代の方に伝えるため、今年から参加対象を中学生から大学生(30歳未満)までの生徒・学生の方としました。



平和に感謝し ありがとう

荒井 信吉さん
(東所沢在住)

語り部の方の話を聞いて、私は広島市の原爆の恐ろしさを改めて感じました。私も戦争体験者です。小さいころの記憶ですが、空襲が本当に怖く、いやだったことを覚えています。

平和というものは、ふだんから意識しているものではないかもしれませんが、一人ひとりが、身近な人との関係や健康、生活に感謝することなのかもしれません。

「生きていて、生きることができてありがとう」という気持ちが大事だと思います。



広島市平和記念式典に参加して

渡澄 とみさん
(上新井在住)

私は、昨年の広島市平和記念式典に参加してきました。参加して思ったことは、女性や子どもでも無差別に被害を被っているという、原爆の悲惨さです。

また、厳粛に行われた記念式典は、テレビで見ると実際に現地で見るとでは、違うものでした。特に子ども代表の「平和の誓い」には、心を打たれました。

一人ひとりが戦争をしてはいけない、平和は尊いということをおうことが大切なのではないでしょうか。

夫は、翌年には職場への復帰も果たし、定年退職するまで職務をまっとうし、66歳で永眠しました。
◎杉本 孝一朗さん
戦争が激しさを増した昭和20年2月、当時13歳の杉本さんは、艦載機からの機銃掃射の中、二人の幼い妹の手をとり、雪降の中をはだして、必死に逃げました。その年3月の東京大空襲などの話を中心で、現在と当時の様子の違いを交えながら、平和の尊さと命の大切さを訴えます。
◎杉本さんの思い
平成17年に広島市平和記念式典参加事業に所沢市民の代表として参加したことが、語り部をするきっかけでした。広島の実相を知り、私にも戦争の悲惨さを語っていただく使命があると一念発起したのです。昭和20年当時、中学1年生だった私は、連日の空襲から逃れるため新潟へ疎開したので、3月9日の東京大空襲の難を逃れましたが、自宅や友人がどうなっているのかとても心配でした。
◎市では、これからも平和の尊さや命の大切さを皆さんに伝えるため、さまざまな平和推進事業を進めていきます。



像を絶するものでした。上野駅に降りて見た景色は、死臭たぐいよう一望焼野原で、戦災孤児といわれる親兄弟を亡くした子どもたちもたくさんいました。食べ物ももちろんのこと、何にもない時代でしたが、みんな一生懸命生き抜いているという感じでした。